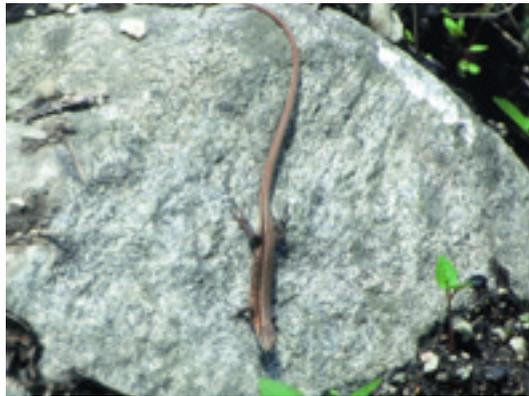


カナヘビ (トカゲ目カナヘビ科)

カナヘビは「ヘビ」と書きますがトカゲの仲間です。北海道、本州、四国、九州や周辺の島々に広く分布し、ふつうに見かけるトカゲです。全長はトカゲとそれほど変わりませんが、ほっそりしていることと尾が体に比べて非常に長いので、トカゲよりも小さく見えます。体表はざらざらしているため、トカゲのような光沢はなく地味な体色をしています。主な生息環境は草地で、林縁の草本が生えているような場所で日光浴をしている姿を見かけることがあります。トカゲほど素早くはないので、意外と簡単に捕獲できますが、草の間をスルスルと潜られるとなかなか捕まりません。餌は小型の昆虫やクモなどです。生息場所としている草地には、バッタなどの小型の昆虫やクモが数多く生息しています。



カナヘビ：尾が長いのが特徴

全長160～270mm、頭胴長50～70mm、体重2～8g。草地を好み、特に巣穴はなく、落ち葉や草むらで生活する。主に昆虫、クモ類を食べる。天敵はヘビ類、鳥類、イタチなどの哺乳類。産卵期は3～5月に始まり、8月初旬に終了する。複数回産卵し、1回に2～6卵。寿命は約7年。



草地のカナヘビ

●天竜川周辺での生息状況とトカゲとの関係

天竜川河川敷にはカナヘビが好む草地が広く分布することから、至るところで見られました。生息数も多いようです。

カナヘビとトカゲは同じ場所で見られることもありますが、多くの場合、好む環境は違うようです。カナヘビは林縁の草地で数多く見られ、トカゲはどちらかというとなが岩が崩れて礫が重なっているようなガレ場で多数見られます。時には両者が同じ場所で見られることもありますが、いずれにしても両種の好む環境はある程度異なっており、この2種はすみわけていると言ってもよいのかもしれない。

●天竜川流域には定着していないヤモリ (トカゲ目ヤモリ科)

ヤモリは長野県内では穂高町柏原で昭和9年7月に捕獲された記録があります。また、三郷村でも平成12年10月に地元の高校生によって採集されています(未発表)。しかし、おそらく県内には定着していないと思われます。

ヤモリは西日本にはふつうに生息します。人家の壁など人工的な環境を利用し、明かりに集まる蛾などの昆虫を食べます。特殊な足により壁を垂直に歩く事ができるため、移動能力が高く、おそらく輸送車などによって全国を移動することができると思われます。東京の都心でもコンビニの明かりに集まる虫を食べにやってくる姿を見かけたことがあります。ヤモリは天井裏の壁などに卵をくっつけて産みます。今後、ヤモリは今まで生息していなかった場所にも定着していくのかもしれない。



ヤモリ

(撮影：白井伸和)

全長100～140mm、頭胴長50～72mm、体重2.3～4.0g。主な生息場所は民家などの建築物。5月上旬～7月下旬に壁の隙間や戸袋、天井裏などに2～3回産卵。アマガエルと同様に周囲に合わせて体色に変化する。主に昆虫類を食べる。

アオダイショウ (トカゲ目ヘビ科)

北海道、本州、四国、九州や周辺の島々に分布しています。全長は最大で3mにも達し、日本最大級のヘビですが、ふつうは全長1.2～1.5mほどです。

体色は地色がオリーブ色で暗褐色の不明瞭な4本の縞があります。アオダイショウの名前は、この緑がかった体色に由来します。幼体ははしご状の斑紋が並び、マムシと間違われることもあります。



アオダイショウ：興奮すると頭を三角形にするが毒蛇ではない
全長110～192cm。樹上性で、6m以上の高さでも見つかる。主に鳥やネズミを餌とし、幼体はカエルやトカゲも食べる。5～6月に交尾し、7～8月に4～17卵を産む。

平地や山地、耕作地周辺や人家付近などさまざまな環境に生息しています。餌は、成体ではネズミなどの小哺乳類や鳥、鳥の卵などですが、幼体のうちは爬虫類や両生類なども食べるようです。たまに、アオダイショウが樹上で活動している姿を見かけることがあり、シマヘビなどに比べて垂直移動が得意なようです。樹上には隠れ場所となる樹洞が開いていることもありますし、餌となる鳥やネズミなどの巣もあるので、アオダイショウにとっても好都合な生息場所なのでしょう。性格は基本的にはおとなしいのですが、個体によってはすぐに咬みついてくるような気の荒いものもいます。

●人家に住むアオダイショウ

アオダイショウは樹上性の傾向が強く、樹洞などによく住みつきます。木造の人家も、見方を変えれば生息に適した大木と変わらないのかもしれませんが、古い家や蔵にもよく住みつきます。

昔の人はアオダイショウが家に住みつくと、家ネズミを食べてくれるので、家の「主」として、とても大切にしていたそうです。特に、養蚕が盛んだった明治・大正時代には、ネズミから蚕を守るとして敬われ、弁財天の使いともいわれ、夢に見れば財宝を得るなどと言って、商家では信仰する者も少なくなかったようです。

現在は古い家もあまり見られなくなり、建築様式も変わって出入りが難しくなり住みつかなくなりました。家の中どころか野外でも田畑の減少や石垣のコンクリート化などで見かける機会が減りました。

●天竜川周辺での生息状況

アオダイショウは天竜川河川敷の調査ではシマヘビほど多くは確認されませんでした。天竜川河川敷にはアオダイショウの餌となるアカネズミや小鳥が多く生息していますので、もう少し多く確認されてもよいはずですが。

この原因は色々と考えられますが、一つには垂直的な行動が得意で樹上性の傾向が強いアオダイショウにとって、開放的な環境である河川敷の環境は地表性の傾向の強いシマヘビほど適してはいないのかもしれないかもしれません。



壁をのぼるアオダイショウ：垂直移動が得意



アオダイショウの幼体：マムシによく間違えられる



マムシ：体型は太くて短いのが特徴

シマヘビ (トカゲ目ヘビ科)

北海道、本州、四国、九州や周辺の島々に分布します。大きさはふつう全長1.2mほどで、背面に走る4本の縦の縞模様が特徴で、シマヘビの名はこれに由来します。

平地から山地の下部にかけて生息し、水田の畦などで多く見られます。餌はカエルやトカゲ類、小哺乳類や鳥だけではなく他種のヘビまで食べ、食性の広いヘビです。

水田の畦などで日光浴をしている姿を見かけることがありますが、動きは素早く、かなり気性が荒く、よく咬みついてきます。

●色彩の変異

名前のおり縞模様が特徴のヘビですが、色彩については地域によって変異があります。縞模様が薄くはっきりしていないものや真っ黒なもの、チョコレート色をしたものまで見られます。さらに、成長段階による色彩の変化もあります。幼体は縞模様が薄く、薄い茶色の横の帯模様が入り、成体（縦縞）とは少し違って見えます。幼体や縞模様のはっきりしない個体は、多少アオダイショウに似ていますが、シマヘビは目の虹彩が赤いので、区別することができます。ちなみに天竜川周辺では縞模様のはっきりとした典型的な個体が多いようです。

●天竜川周辺での生息状況

天竜川河川敷では見る機会の多いヘビです。特に河川沿いに置かれている蛇カゴ周辺では、日光浴をしている個体や石の隙間に潜んでいる個体を多数見ることができました。蛇カゴ周辺では、この他にアオダイショウ、ジムグリ、ヤ



シマヘビ：縞模様と赤い目が特徴

体長80~200cm。昼行性で、開けた環境を好む。動きが速く、追いつめられると身体をS字状にして威嚇する行動が見られる。トカゲ、カエル、ネズミなどを食べる。4~6月に交尾し、夏に4~16この卵を産む。



シマヘビの幼体：成体とは異なる横帯模様が特徴

マカガシなどが見られ、ヘビ類の恰好のすみかとなっているようです。これは、蛇カゴの隙間がヘビにとってよい隠れ場所であり、さらに餌となるネズミ類が多く生息していることなどが理由でしょう。

真夏の河川敷は日射しが直接地表面に当たるため、地表はとても暑くなります。木が多ければ日射しは遮られますが、河川敷のヤナギ林などは地表の草本類が貧弱で、ヘビもあまり見られません。また、河川敷に広く分布するヨシ原は、夏は空気がこもるために、地表面は非常に暑くなり、ヘビの生息には適しません。

天竜川の夏の調査で見られたシマヘビは、川で泳いでいたり、湿地でとぐろを巻いていたり、水田の用水路の水中に潜っていたりと、涼しい場所を選んでいるようでした。ヘビ類も活動場所や活動時間を変えるなどして、厳しい夏の暑さに対処しているのでしょう。



成長しても横帯模様の残るシマヘビの亜成体



水辺のシマヘビ



ヘビ類の生息地となっている蛇カゴ周辺

ジムグリ (トカゲ目ヘビ科)

北海道、本州、四国、九州などに分布する日本固有種です。体はアオダイショウやシマヘビなどに比較して小さく、日本のヘビの中では中型のヘビです。全長は大きくても1mほどで、赤褐色の美しい姿をしています。幼体は赤味が強く、多数の黒点が混ざります。頭部はアオダイショウやシマヘビに比べて小さいのですが、ネズミなどの小型哺乳類を主食とし、その巣穴に潜り込むために「地に潜る」ことからジムグリの名が付いたと言われます。



ジムグリ：淡い赤褐色の体色は上品な美しさをもつ
全長70～100cm。主に森林に生息。地中の穴によく潜り、ネズミ類を食べる。4～6月に交尾し、7～8月に1～7卵を産む。(撮影：澤島拓夫)

性格は非常におとなしく、捕まえても咬みつかることはほとんどありません。基本的には昼行性ですが、暑さにはあまり強くないようで、真夏の昼間には観察できなくなります。夏の暑い日などには、夕方から夜間にかけて活発に活動している姿を観察できます。

●山麓に多いヘビ

ジムグリは山道を歩いているとよく見かけます。山地が多い長野県ではポピュラーなヘビです。森林内は、畑や水田の畦など開放的な環境に比べて気候が穏やかで、暑さも和らげられるので、暑さに弱いジムグリの生息数も比較的多いでしょう。また、森林内には、餌となるヒメネズミなどの小型哺乳類も多く生息しています。

●天竜川周辺での生息状況

今回の調査で天竜川の河川敷にも生息していることがわかりました。春には交尾をしている姿も観察されました。河川敷周辺の環境は森林内とは違って開放的な環境であるため、ふだんのような場所に身を隠しているのかは興味深いところです。ジムグリはネズミなどが利用している土中の穴に潜っていることもありますので、そのような穴の中に潜んでいるのかもしれない。



ジムグリの幼体：赤味の強い体色と小黒点が特徴

ヤマカガシ (トカゲ目ヘビ科)

本州、四国、九州や朝鮮半島、中国などに分布します。全長は1mほどですが、時には1.5m近い個体が確認されることもあります。体色は、赤味が強く派手な個体が多いのですが、地域による変異が大きく、褐色で黒色の斑紋が薄いもの、赤味がほとんどなく黒色の斑紋が目立つものなどがあります。長野県内では赤味の強い個体が多いようです。幼体では首のあたりに走る黄色の横帯が目立ちます。



ヤマカガシ：赤味の強い毒々しい色をしている
全長70～150cm。体重30～600g。平地の個体よりも山地の個体の方が大型化する。平地から山地まで生息し、主に昼間に活動。平野部では冬眠明け～梅雨明け、秋に出現数が増大する。主にカエルを捕食。4～6月、10～11月の2回交尾し、産卵は6～8月。石や草の下に産む。寿命は約6年。

●毒のあるヘビ

一般にはあまり知られていませんが、ヤマカガシには毒があります。上あごの前方に細長い毒牙を持つマムシやハブのような毒蛇とは異なり、上あごの後方に短い毒牙を持つため、深く咬みつけれない限り、それほど多量の毒は注入されないようです。そのため、咬まれて重症となる例はあまりありませんが、死亡例もありますので注意が必要です。ヤマカガシはおとなしい個体もいますが、すぐに咬みついてくる気の荒い個体もいます。



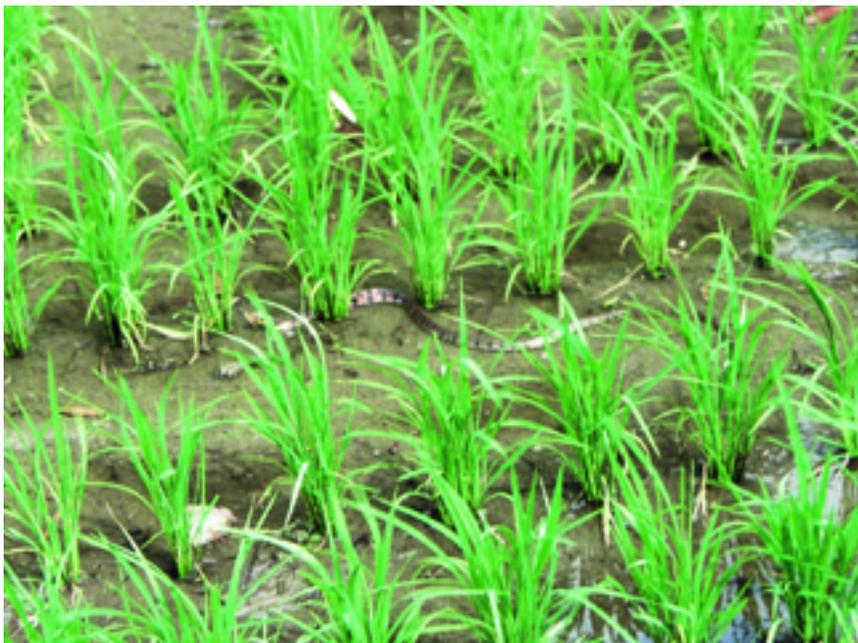
ヤマカガシ幼体：頭の付け根の黄色いラインが特徴

●カエルの天敵

カエルにとってヤマカガシはかなりの天敵となっています。ヤマカガシの毒はカエルには強く作用するようですし、飼育してみると、ヤマカガシはかなりの大食漢です。ヤマカガシはカエルを主食とし、小魚なども食べ、河川敷や水田の畦などに多く見られます。しかし、山地などでも見かけることがあります。カエルの中にはヒキガエルのように乾燥に強く、水辺から遠く離れている種もいますので、それらを食べることができればヤマカガシも生きていくことができるでしょう。ヒキガエルには耳腺に毒があるためか、他のカエル食のカエルには敬遠されているようですが、ヤマカガシは平気で飲み込みます。

●天竜川周辺での生息状況

ヤマカガシは、今回の調査でシマヘビの次に多く目撃されたヘビです。主にカエルを食べているヘビですので、天竜川の河川敷に生息するアマガエルやトノサマガエル、ダルマガエルなどを食べて生きていると思われます。トノサマガエルやダルマガエルなどの止水性のカエルは流れの緩やかな小川や水溜まりに多く見られます。したがって、ヤマカガシの生息にとっては、このような餌動物の捕らえやすい環境が重要であると考えられます。



水田のヤマカガシ

ヒバカリ (トカゲ目ヘビ科)

本州、四国、九州や周辺の島々に分布する全長50cmほどの小型のヘビです。体色は背面が淡い茶褐色で腹部は黄白色、特徴は顎から頭の付け根にかけて走る白いラインです。地味なヘビですが、派手な模様のヘビにはない独特の雰囲気、美しさがあります。

ヒバカリの名は「咬まれたら『その日ばかり』の命」ということから由来しているという説もありますが、性格は非常におとなしく、捕獲しても咬まれることは稀ですし、頭も小さい

ので、噛まれたとしてもたいしたことにはなりません。もちろん毒もあります。水辺や湿った環境で多く見られ、餌もそのような場所に多くいる小型の魚、カエル、オタマジャクシ、ミミズなどです。昼間に活動していることもありますが、夕方から夜間あるいは雨の日や曇りなど天候の悪い日に観察されることが多く、水辺で餌となる動物を捕食しています。

●オタマジャクシを狙うヒバカリ

水辺で獲物を狙うヒバカリにとって、オタマジャクシは恰好の餌となっています。孵化したばかりのオタマジャクシは動きも鈍く、水深の浅いところに集まっていますので、餌として簡単にとることができるでしょう。時には、卵から孵ったばかりのオタマジャクシの集団を狙っている姿が観察されます。また、モリアオガエルの卵塊も狙われることがあり、モリアオガエル独特の白い泡状の卵塊の中にヒバカリが頭を突っ込んでいる姿も観察されています。



ヒバカリ：頭の付け根にある白いラインが特徴
全長40～60cm。体重10～25g。水辺や湿った環境に生息し、カエル、ミミズを食べるほか、水にもよく入り小魚を食べる。主な活動時間は早朝と夕方。5～6月に交尾、7～8月に4～10個の卵を産む。寿命約6年。



モリアオガエルの卵塊に頭を突っ込むヒバカリ

●天竜川周辺での生息状況

今回の調査では、シマヘビやアオダイショウ、ヤマカガシ、ジムグリなどに比べて発見数が極端に少なく、生息数も少ないと考えられます。これは、他のヘビに比べて夜行性の傾向が強いため、なかなか発見できなかったことが原因なのかもしれません。唯一確認できた場所は、羽場下の親水公園の用水路付近でしたが、この地点は段丘崖のケヤキ林と連続しており、カエル類も多く、春先には餌となりそうなヤマアカガエルの上陸したての幼体も多数見られました。また、森林と連続していることにより落葉や枯れ枝などが堆積し、土壌の湿性が保たれている場所もありました。ヒバカリは乾燥に弱いようなので、活動していない時はこのような湿った場所に潜んでいるものと考えられます。

●減少しているヘビ

ヒバカリはシマヘビやアオダイショウ、ヤマカガシなどに比べて環境選好性の幅が狭いため、生息環境を選びます。このため、水辺環境の改変に非常に影響を受けやすいヘビであり、爬虫類の中でも特に減少しているヘビの1種であると考えられます。ヒバカリは、環境のよく保たれた里山の水田などでは比較的よく見られるヘビですので、環境の指標動物として見るのできるヘビであると考えられます。



水辺のヒバカリ



天竜川でヒバカリが確認された地点（辰野町羽場）

その他、伊那谷で見られるヘビの仲間

今回の調査では確認されませんでした。この他に伊那谷にはシロマダラとタカチホヘビというあまり人目につかない夜行性のヘビや、毒蛇として有名なマムシが生息しています。シロマダラやタカチホヘビは、夜間、山地の林道上を徘徊していたり、アスファルトの路上でジッとしているところを見かけることがあります。特に、5～6月の暖かく、雨の降っている夜には、観察できる可能性も高くなります。生息密度の高い地域では、路上で車に轢かれたこれらのヘビの死体をよく見かけます。不思議なことに、これらの死体が見られる場所は特定の場所であることが多く、それほど離れていない場所で年に何度も死体を見ることがあります。

●爬虫類を食べるヘビ ～シロマダラ～

シロマダラはその名のとおり、黒地に白い模様が美しく、上品なヘビです。体型はアオダイショウやシマヘビなどと比較して、細長く、大きさも70cm程度と比較的小型です。目はネコのように瞳孔が縦長です。無毒のヘビですが、意外に気が荒く、掴んだりするとよく咬みついてきます。餌は主に爬虫類で、トカゲやヘビを食べています。ヘビを食べる場合には、食べることで獲物の大きさも限られてくると思われ、幼体のヘビや、小型のタカチホヘビなどが恰好の餌になっていると思われ。特にタカチホヘビは、ほぼ同じ時間帯に、ほぼ同じ場所で見られますので、よく食べているのではないのでしょうか。



シロマダラの幼体：白黒の模様が美しい

全長30～70cm。体重8～30g。平地から山地まで生息し、夜行性で、狭い隙間や石の下などに隠れている。トカゲや小型のヘビなどを主に食べる。活動期は5～10月。6～8月に1～9個の卵を産む。

●ミミズ食のヘビ ～タカチホヘビ～

タカチホヘビは茶褐色のヘビで、一見地味ですが、角度や光の当たり方によっては、真珠のような光沢を生じ、非常に美しく見えます。

この名前は、明治28年（1895年）に高千穂宣麿という方が採取した標本をも

とに報告されたことによります。

背中に沿って走る黒色のラインと腹部の黄白色が特徴で、頭や目は非常に小さく、時折口から出す糸のように細い舌が印象的です。大きさは小型で、成体でも50cmほどしかありません。幼体にいたっては、野外で遠くから見るとミミズのようにしか見えません。性格はおとなしく臆病で、人に咬みつくことは全くありません。餌はミミズやナメクジといわれています。乾燥に弱く、ジメジメしたところを好み、昼間は石や倒木の下に潜んでいます。夜間には地表で活動しますので、観察の機会も増えます。雨の日に多く見かけますが、餌となるミミズが地表に多く出てくるからでしょうか、その理由はまだよく分かっていません。



路上を徘徊するタカチホヘビ

全長30～60cm。地中性で、主に夜間に活動する。石や朽ち木の下に潜むことが多い。ミミズを食べる。

●珍しいヘビ？

シロマダラやタカチホヘビは珍しいヘビという印象がありますが、それは彼らが夜行性であり、生息場所が局所的であるため、人の目につきにくいことが主な原因となっているようです。場所と時間帯によってはそれほど少ないヘビではないと考えられます。しかし、生息環境をかなり選びますので、これらのヘビの生息が確認された地域の自然環境は大切にしたいものです。また、これらのヘビの生態や分布はまだあまり知られていないので、今後の研究課題となるでしょう。

マムシ (トカゲ目クサリヘビ科)

北海道、本州、四国、九州や周辺の島々に分布します。多くのヘビは卵を産みますが、マムシは親と同じ形をした子供を産みます。頭が大きく三角形であることが、他のヘビと区別する時に有効だと言われますが、アオダイショウやシマヘビ、ヤマカガシも興奮すると頭を三角にしますので、頭の形だけで判断できません。また、アオダイショウの幼体や亜成体にも身体に大きな斑紋があり、時々マムシと間違われることがありますが、体型が太く短いことで判断できます。

●危険なヘビ？

性格は比較のおとなしく、動きも緩慢です。しかし、日光浴をしている個体は体温が上昇して動きが早くなります。落ち葉の上では色彩が地表と似ているため、なかなか発見できません。このような場面にマムシに気づかずに人間が近づくと咬まれる可能性があります。それほど恐れる必要のないヘビですが、知らずに近づいたり、おもしろ半分に手を出したりすると危険です。



マムシ

全長40～65cm。体重35～150g。森林やその周辺の田畑に多い。夜行性だが、冬眠前後と夏には、昼間、日光浴に出てくる。カエルやトカゲ、ヘビ、鳥類、ネズミなどを食べる。8～9月に交尾し、翌年8～10月に5～6匹の幼蛇を産む。

●マムシは珍しい

今回の調査ではマムシは確認できませんでした。マムシは食性の幅が広いので、どこにでも生息できるような印象がありますが、実際はかなり生息環境を選ぶようです。

マムシは毒蛇であるため、人間に目の敵にされています。水辺や山林などで「マムシに注意！」の看板をよく見かけますが、人がヘビを嫌うよりずっとヘビのほうが人を怖がっているはずで。

マムシは環境の改変に弱く、現在では昔ほど見られなくなりました。しかし、マムシに対する人間の恐怖心は昔と変わっていないので、見つけ次第殺すという習慣が残っています。注意さえすれば、それほど危険なヘビではないのですから、ヘビが嫌いな人でも、その存在を認め、互いに干渉しないようにそっとしておくことが必要でしょう。マムシがいるということは、昔ながらの自然環境がよく保たれていることを示しているのですから。

コラム

はちゅうるい
爬虫類観察の楽しみ

市街地近郊でも、ある程度の自然が残されていれば、多くの生き物たちが生活しています。爬虫類の仲間も例外ではありません。田や畑などの草地では走り回るカナヘビを見かけるでしょうし、日当たりが良くて礫の多い河原や人家近くの石垣では青いシッポのトカゲの幼体を見ることもあるでしょう。カナヘビは素早いですが、子どもの手に追えないほどではないので、一昔前の子どもたちの良い遊び相手でした。今の子どもたちにとってはどうでしょうか？トカゲは体温が充分上がっている時にはとても動きが速く、素手ではなかなか捕まえられません。

好き嫌いはともかく、「ヘビ」は馴染み深い生き物ではないでしょうか？はるか昔から、嫌悪の対象と同時に信仰の対象でもありました。野外調査の際に、地元の人たちに聞き取りを行なうと、多くの人がヘビとの個人的なエピソードをそれぞれ持っていて、面白いものです。

ヘビをよく目にするのは一般的に春と秋です。夏の暑さはヘビたちにとっては過ごしにくいようで、炎天下を避けて朝晩に活動しているようです。

春、田に水が引かれるとカエルたちの産卵が始まります。そのカエルや卵から孵化したオタマジャクシを目当てにヤマカガシ、シマヘビ、ヒバカリなどが集まってきます。水田の周辺はヘビを観察するにはもってこいの場所です（ただし、水田は私有地であることを忘れずに！）、晴れた日にはヤマカガシとシマヘビがよく目につきます。ヘビ探しをしていて、カエルの悲鳴を聞きつけて駆けつけると、まさにヤマカガシにカエルが飲み込まれようとしている現場に遭遇する場合があります。野生動物が獲物を狩る場面ですから、相当な空腹状態なのでしょう。カエルには気の毒ですが、そのまま観察していると、ヤマカガシは私たちの存在を気にしつつ、顎を左右交互に動かしながら一気に呑み込んでいってしまいます。

シマヘビもカエルを主に食べるヘビですが、こちらは他にもさまざまな生物を食べます。車で走っていて、路上に不思議な形のヘビを見つけて降りて行くと、ヤマカガシがシマヘビにぐるぐるに巻き付かれ、飲み込まれようとしているところでした。この時シマヘビはすぐに獲物を放して逃げ出しましたが、ヤマカガシはすでに瀕死の状態でした。よく見ると、近くの草陰であのシマヘビが身を隠して我々が立ち去るのを待っています。せっかくの獲物は胃に収めたいのであろう、と早々に立ち去りました。

アオダイショウは家屋に出入りするネズミやスズメなどを餌とし、人家周辺にすみついています。アオダイショウが軒下のツバメの巣を襲っている場面を見て「ヘビが嫌いになった！」という人もいましたが、ヘビとて生きるために食べていかなければならないのは私たち人間と同じです。春先に、庭先や道端で長々と横たわって呑気に昼寝をしていて、人の接近に気づいて一目散に逃げていく姿は実にユーモラスです。

ジムグリは森林周辺にすみ、ネズミなどの小型哺乳類を食べます。日中によく見かけるのは、春先に冬眠場所と思われる石垣の近くなどで昼寝をしているところです。それ以外では、夕刻に太陽熱で温まったアスファルトの路上でジッとしているのを見かけます。夜行性の彼らは、日暮れからの狩りのために体温を得ているのでしょう（そのままクルマに轢かれてしまうものもよくいるのですが）。

ヒバカリはカエルを主に食べるヘビで、やはり夜行性の傾向が強く日暮れ近くに水辺でよく見かけます。直射日光に弱いいためか、夕方や夜間あるいは曇りの日の日中に活動しているようです。子どもたちと一緒に電灯に飛んで来るカブトムシを採りに行って、ひょいと覗いた側溝の中に、群れるオタマジャクシをひたすら食べているヒバカリを見たことがあります。潜水もお手のものです。

マムシの実物を目にする機会は多くありません。また、実際にその生息数自体も少なくなってきたのではないかと思います。マムシに会おうと思ったら梅雨から夏の時期、蒸し暑く小雨の降る夜にマムシのいそうな田んぼや湿地周辺、河原などに出かけるとよいでしょう。こんな夜は餌となるカエルもよく活動しているからでしょうか、待ち伏せ型の狩りをするマムシは、獲物が目の前を通るのをトグロを巻いてジッと待っています。マムシが多く生息している場所は、自然環境が変化に富み、生物の多様性も豊かであることが多いようです。

このほか、夜行性のヘビにシロマダラとタカチホヘビがありますが、これらは夜間に路上を根気よく探す以外、目にする方法はないくらい出会うのが難しい種です。

野生のカメは、生息数の多い地域では川や池などで目にするのですが、それ以外の地域ではまず目にする機会はありません。一般に、カメはあまり寒冷な地域には生息しない傾向があります。ペットとして流通し、よく知られる動物ながら、野生の暮らしは知られていない動物です。野生のカメは警戒心が強く、生息していても、なかなかその姿を見せません。カメにとって必要不可欠な「甲羅干し」も、用心深く岸辺のヨシなどの遮蔽物の中で行なっていることが多く、人目につきにくいのです。

天竜川水系で生息の考えられるイシガメは、岐阜県東部や愛知県北部で確認していますが、長野県側での生息確認はありません。しかし、過去の文献にはイシガメが記録されています。まったくカメの記録がなくても、トラップを用いて捕獲を試みると捕まるケースもありますので、生息を確認するには入念な調査が必要でしょう。カメの多い地域ではカメは川のシンボルとも言え、川を覗くと容易にカメの姿が認められます。もっともこのような自然環境の豊かなところは現在では珍しいのですが。

このように、地域性のあるカメ類を除いて、ヘビなどは本来どこにでもいる生き物であったはずですが、しかし最近では自然環境の変化の中で、そのヘビたちを探すのも難しくなっています。

（前澤 勝典）